



宮沢 洋(みやざわ・ひろし)

画作家、BUNGA NET代表兼編集長。1967年生まれ。1990年早稲田大学政治経済学部政治学科卒業、日経BP社入社。2016年～19年、日経アーキテクチャ編集長。2020年独立、建築ネットマガジン「BUNGA NET」を運営。著書に『隈研吾建築図鑑』『日本の水族館五十三次』など

東京を守った技術者へのリスペクト

旧岩淵水門 (赤水門)
東京都北区志茂 5-42-6

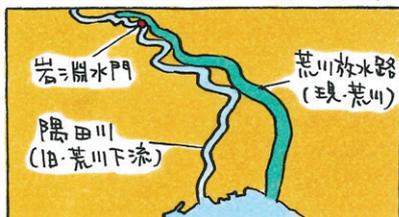
Vol.02

経済産業省の近代化産業遺産に認定されている。水門としての役割は終わっているが、併設された橋は通行可能で、歩いて中洲の緑地にわたることができる。近くに「荒川知水資料館 amoa」(入館無料)があり、こども必見。

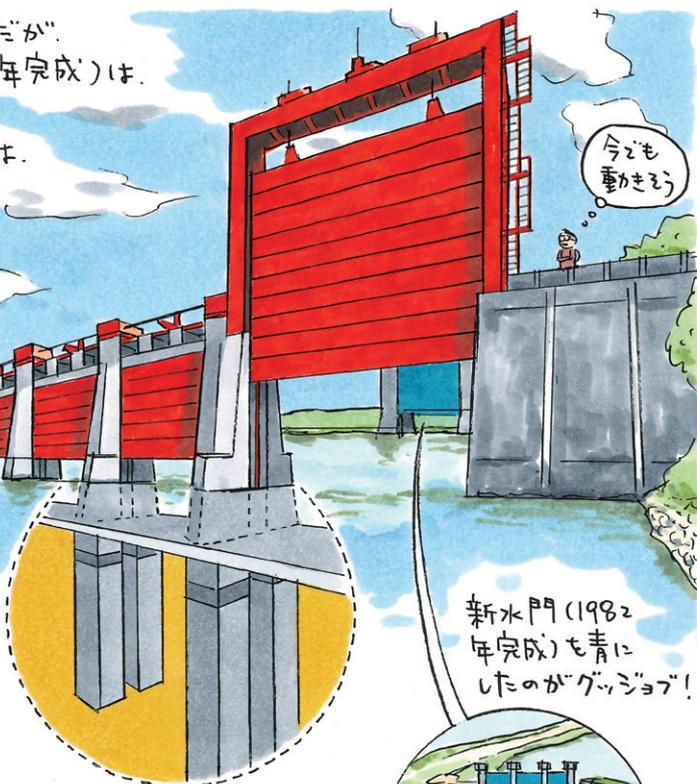
「系念にけろ」「見たくなる」というこの企画だが、今回の「旧岩淵水門」(東京都北区、1924年完成)は、そこに加えて「勉強にけろ」!!
我々が今、「荒川」と呼んでいる川の大半は、人間がつくったものだから、全く知らなかった……。

川の対岸は、埼玉県川口市

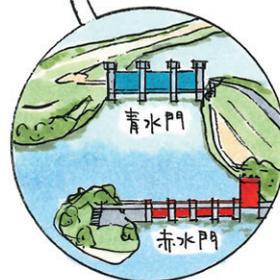
ざっくり言うと、「荒ぶる」荒川のう回路として、「荒川放水路」も整備。



岩淵水門よりも下流が「隅田川」の名となり、荒川放水路は後に「荒川本流」となった。



旧水門は、初期の鉄筋コンクリート構造物。川底から約20mの深さまでコンクリート・ケーソンを埋めて基礎にした。



東京に暮らす人ならば誰もが知る荒川。その名前の由来が、大氾濫を繰り返す「荒ぶる川」であったことをご存じだろうか。旧岩淵水門は、荒川の治水の要として1924年(大正13年)に完成した。国は荒川のう回路として、東京都北区から東京湾までつながる荒川放水路をつくり、分岐点に水門を設置した。

水門設計の中心になったのは日本を代表する土木技術者、青山士(あおやま・あきら)だ。東京帝国大学土木工学科を卒業後、当時建設中だったパナマ運河(1914年完成)を学ぶために単身渡米。唯一の日本人として8年間その工事に携わり、帰国後8

年をかけて荒川の水門を完成させた。

昭和30年代の改修で赤い色に塗りかえられ、「赤水門」という愛称で地元の人々に呼ばれるようになった。1982年(昭和57年)、約300m下流に新岩淵水門(青水門)が完成し、その役割を終えた。

クリスチャンであった青山のモットーは、“I wish to leave this world better than I was born.”(私がこの世を去る時には、生まれてきた時よりも良くして残したい)だったという。今でも動きそうなほどきれいに残された旧水門には、現在の土木技術者たちの青山へのリスペクトが感じられる。

